

# よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



24

よろこびの知らせ  
第24集

目 次

聖書の確かさ .....	1
テモテ第二 3:14-17	
聖書が分かる時 .....	10
エペソ 1:15-19	
みことばを心に .....	19
コロサイ 3:16	
人生の道しるべ .....	28
ヤコブ 1:21-22	

ここに収められたメッセージは、2021年9月にテキサス州  
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも  
のです。聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

# 聖書の確かさ

## テモテ第二 3:14-17

3:14 けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、

3:15 また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができますのです。

3:16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。

3:17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。

### 一、聖書に従って

私たちは昨年 12 月から今年の 7 月まで、およそ 8 ヶ月の間、ルカが書いた「使徒の働き」や使徒たちが書いた手紙から、使徒たちがどのようにイエス・キリストを伝えたかを学んできました。そこから分かることは、使徒たちが「聖書に基づいて」イエス・キリストを伝えたということです。

ペテロはペンテコステの説教でヨエル書や詩篇を引用して、ペンテコステの出来事と、イエスの復活を語りました（使徒 2 章）。ピリポはイザヤ書からイエスのことを宣べ伝えています（使徒 8 章）。パウロは、安息日にはユダヤの会堂に行き、そこで朗読される律法と預言に基づいてイエスがキリストであることを語りました（使徒 13 章）。使徒 17:2 に「パウロはいつもしているように、会

堂には行って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた」とあります。また、聞いた人々もパウロが教えたことが「はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べ」ました（使徒 17:11）。聖書に基づいて語られた福音を聖書に基づいて確認する。そうすることによって聖書に基づいた信仰が築かれていったのです。それが使徒たちの時代の宣教、伝道でした。

ローマ人への手紙は、パウロがイエス・キリストを信じる信仰について順を追って書いたもので、そこでは、「福音は…聖書において前から約束されたもの」（ローマ 1:2）とされています。また、「聖書何と云っていますか」（同 4:3）、「聖書はこう云っています」（同 10:11）、「聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか」（同 11:2）などと、パウロは聖書に訴えて、信仰の真理を解き明かしています。

そして、コリント第一 15:3-5 にはこうあります。「私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。」福音で「最も大切なこと」はイエス・キリストが「死なれ」、「葬られ」、「よみがえられた」ことだと言っています。そして、この箇所は、キリストの死も復活も、聖書に従って起きたことだと教えています。ここでは「キリストは、聖書の示すとおりに

に、私たちの罪のために死なれた」、また、「聖書に従って三日目によみがえられた」とあります。「聖書の示すとおりに」と「聖書に従って」とに訳し分けられていますが、もとの言葉は同じです。イエスが私たちの罪のために死んでくださったことも、私たちの救いのために復活されたことも、「聖書に従って」なのです。つまり、イエス・キリストの救いは聖書が預言し、聖書に従って成し遂げられ、聖書によって示されて私たちのところに届けられたということです。テモテ第二 3:15には「聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができる」との言葉は、聖書から離れて、私たちの救いはないという明白な真理を述べているのです。

## 二、聖書への攻撃

「聖書は真実な神のことば。」これは19世紀になるまで、誰も否定しなかった真理の大前提でした。ところが、進化論的な思想が神学の分野に入ってくるようになり、聖書や聖書に基づく信仰も「進化」して生まれたと考える人たちが出てきました。シュライアマハー、リッチュル、ハルナックといった人たちです。この人たちの神学は一般に「自由主義神学」と呼ばれます。伝統や権威から自由になって、人間の理性だけで聖書を理解しようとしたからです。そして、理性だけで理解できない部分を聖書から削りとりとうしました。たとえば創世記の天地創造からノアの洪水にいたる出来事は実際に起こったことではなく、古代の「創造神話」や「洪水神話」が

ユダヤ人の手によって聖書に加えられたというのです。神話的の形をとって語られている中から道徳的なメッセージを取り出して、それを現代に当てはめて生かすことが大切であると言い、それを「非神話化」と呼びました。自由主義神学では、人間は善良なものであって、この世界を限りなく良くしていく力を持っている。聖書は人を罪から救うというよりは、人間の善良さを励ます書物だと考えました。

また、自由主義神学では、今までモーセや預言者たちによって記されたとされてきた旧約の大部分は、ユダヤの人々がバビロンから帰ってきてから書かれたものであると主張しました。なぜなら、聖書にはいたるところに捕囚からの帰還が預言されているからだと言うのです。

「預言はない」という前提を持てば、聖書を書いた人たちはその出来事が起こってから、それを預言の形で書いたということになります。マタイ、マルコ、ルカの福音書はエルサレムが滅びることを預言していますから、こうした福音書はみな紀元 70 年にエルサレムが滅亡した後に書かれたことになります。しかし、聖書学の研究によれば、マタイ、マルコ、ルカの福音書はそれ以前に書かれていることが分かっています。

私たちは自由主義神学をとりませんが、だからといって理性を否定して、盲目的に聖書を信じ込んでいるわけではありません。使徒の後継者たちが書き遺した歴史資料、考古学や聖書学、言語学などの学問的な証拠に基づいて、そう信じているのです。19 世紀は自由主義神学の

盛んな時代でしたが、同時に重要な考古学の発見が相次いで時代でもありました。1884年には、4世紀頃のものとして「シナイ写本」が発見され、1947年には「死海写本」が発見されました。「死海写本」には紀元1世紀、イエスと弟子たちの時代の旧約の写本があつて、この発見は、今日私たちの持っている聖書がどんなに正確なものであるかを証明するものとなりました。

自由主義神学の立場に立つ人は、聖書の学問的な証拠ではなく、「すべては合理的に説明されなければならない」という前提で聖書を解釈します。しかし、その前提そのものが間違っています。聖書にかぎらず、どんな学問においても、人間の側の先入観で対象を見ると間違えてしまいます。学問は客観的な証拠によって組み立てられなければなりません。そして、そのような研究から導かれたのが「聖書は真実な神のことば」という結論なのです。

### 三、聖書の靈感

「聖書は神のことば」といっても、それは、「十戒」の二枚の石の板のように、神がその指で直接書かれたものや、預言者たちが「主はこう言われる」と言つて、神が語られた通りの言葉が記されたものばかりではありません。多くの部分は長い年月の間に、さまざまな人々によって書かれたものです。聖書を書いた人々は誠実に、良心的にそれを書きましたが、そこに間違いが入り込まないと言い切ることはできません。それで、人間の限界や弱さをよくご存知の神は、聖書を書いた人たちが誤り

なく、それを神のことばとして残すことができるよう特別な働きをお与えになりました。それが、テモテ第二 3:16 に「聖書はすべて、神の靈感によるもので」とある「靈感」です。

「靈感」（インスピレーション）というと、人間の「ひらめき」といった意味で受け取られがちですが、「聖書が靈感によって書かれた」というのは、人々が、ハッとひらいめいて、その瞬間に、それを忘れないうちに文章を書いたということではありません。聖書がいう「靈感」は、人間の側のひらめきではなく、神のことばが文字となって残るための聖霊の特別な働きを言うのです。

「サムエル記」、「列王記」、「歴代誌」などの旧約の王国の歴史を書いた部分などは、おそらく、何人もの「王国史編纂委員」のような人々によって、さまざまな史料が集められ、討論を重ねながらまとめあげられていったことでしょう。ルカはルカの福音書を「すべてのことを初めから綿密に調べ…順序を立てて書いた」と言っています。聖書のほとんどは、私たちがものを書くのと同じ方法で書かれました。

パウロがコリント人への第一の手紙を書いたのは、コリント教会からの質問状に答えるためでした。パウロはコリント教会で起こっているさまざまな問題を聞き、心を痛めながら、それらの問題に対する最善の解決を探り求めて、一つひとつの質問に答えていきました。パウロはあるところでは「命じるのは、私ではなく主です」



（コリント第一 7:10）と言い、別の部分では「これを言うのは主ではなく、私です」（同 7:12）、また、「私の意見では…」（同 7:40）と言って、主イエスがはっきり語られたことと自分の意見とをきちんと区別しています。譲れないものと許容できること、また、命令と推奨とを分けて書いているのです。そこには人間の理性や感情が強く働いています。けれども、聖霊はパウロの理性や感情をも用い、それに働きかけられたのです。それが靈感です。パウロは「私も、神の御霊をいただいていると思います」（同 7:40）と言っていますから、靈感を感じながら手紙を書いたことでしょう。

「靈感」については、ペテロもこう述べています。「彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。」（ペテロ第一 1:11-12）旧約の預言者たちも、新約の使徒たちも聖霊によって語ったのです。「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」（ペテロ第二 1:21）

聖書は聖霊によって与えられた。ここに聖書の確かさがあります。現代は、かつての時代よりも情報が簡単に手に入るようになりました。それだけに、何が正しく真実なものかを見極めることが大切になってきました。以前は新聞やラジオ、テレビのニュースを信頼していればそれで良かったのですが、今はそうとは言えなくなりました。「フェイク・ニュース」を正すために「ファクト・チェック」をしましたなどと言われるのですが、その「ファクト・チェック」が「フェイク」であったりすることもあるのです。

私たちの人生を、この社会を、そして世界の将来を教える確かなことば、「聖書」が、今、最も必要な時です。テモテへの第二の手紙は、パウロが殉教前に書いた最後の手紙です。パウロは、こののち教会が迫害に見舞われると同時に、教会内からも様々に間違っただけを教える人々が起こることを見抜いていました。だからこそ、パウロは後継者テモテに、いつの時代にも変わらない確かな神のことばに立つことを教えたのです。

「聖書は神のことば。」これは私たちの信仰の基礎です。当然と言えば当然のことですが、同時に、このことは最も攻撃を受けやすい部分でもあるのです。神に敵対する人たちは「聖書はたんなる人間の言葉に過ぎない」と言います。そうであるなら、聖書のどんな約束も、神の約束ではなく、「そうであつたらいいのに」という人間の願望を書いただけのものになってしまい、それに信頼しても意味のないことになります。

しかし、テモテは聖書が靈感によって与えられた「神のことば」であり、聖書に書かれている約束は神の約束であり、信じるなら、必ずその通りになることを知り、確信していました。パウロが「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです」（14-15節）と言っているように、テモテは祖母ロイス、母ユニケから聖書を学び、聖書に親しんできました。そして、パウロに出会い、聖書が示す福音を聞き、信じ、救われ、それを宣べ伝えてきました。私たちも聖書を神のことばと信じる教会で、正しく聖書を学んでいる幸いを感謝しましょう。そして、「学んで確信したところ」に留まり、確かな神のことばに導かれて歩んでいきましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたはあなたのお言葉を聖霊によって書物とし、救いに導く確かなものとして、私たちに与えてくださいました。聖書に信頼する者は決して裏切られることはありません。どうぞ、私たちを、さらに聖書に親しみ、あなたの言葉に信頼し、それによって導かれる者としてください。主イエスのお名前です。

# 聖書が分かる時

エペソ 1:15-19

1:15 こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、

1:16 あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。

1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。

1:18 また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、

1:19 また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

## 一、知識と知恵

「聖書が分かる」とはどういうことでしょうか。どうしたら「聖書が分かる」ようになるのでしょうか。きょうは、聖書を手にする人なら誰もが知りたいと思うことについて話します。

ものごとを知るといえるとき、二種類の知り方があります。聖アウグスティヌスはひとつを *scientia* と呼び、もうひとつを *sapientia* と呼びました。*scientia* という言葉から *science* (科学) という言葉が生まれたように、*scientia* は目に見える様々な現象についての情報を得ることを指します。「知識」と訳してよいでしょう。これに対して *sapientia* は「知恵」と訳すことができ、これは、目に見え

様々な現象の背後にあるものについての洞察や理解を意味します。「知識」が客観的なものであるのに対して「知恵」はより主観的、体験的なものです。

たとえば、「私はジョージ・ワシントンを知っている」と言う場合、私たちの場合は、アメリカの初代大統領で1ドル冊に肖像がある人という程度でしょう。「1732年2月22日にヴァージニア州ウエストモアランドで生まれ、1799年12月14日、67歳のとき、ヴァージニア州マウントバーノンで亡くなった。彼は独立戦争を戦って、アメリカの初代大統領となった。大統領を Mr. と呼ぶこと、任期を2期までとすることなどの慣例を残した」などといったことは歴史を学べば知ることができますが、それは客観的な知識にすぎません。しかし、ジョージ・ワシントンのもとで独立戦争を闘った兵士たちは、敗戦につぐ敗戦の中でも決してあきらめず、兵士たちを励まし、導いた偉大な指導者として、ワシントンを見ていました。彼の忍耐や勇気や決断を心に刻んだことでしょう。彼らはワシントン将軍についてのことがらを知っていたというよりは、ワシントン将軍、その人を知っていたのです。

ジョージ・ワシントンは「祈りの人」として知られています。彼は独立戦争の間も毎日兵士たちを集めて祈りの時を持っていました。大統領を退職してからも、祈りの生活を守り続けました。夕食後、みんながどんなに楽しい団欒のときを過ごしていても、夜9時になると、彼は、かならずキャンドルを持って自分の書斎に引きこも

りました。彼の甥が、好奇心から、叔父の部屋を覗いてみると、ワシントンは、椅子の前にひざまずいており、その椅子には聖書が開かれていました。かっきり 10 時まで、祈りが続いたそうです。ワシントンは 20 歳の時から、こうした祈りの生活に入ったことが、彼の書き遺した「祈りの日記」に示されています。私たちはそうしたものを読んで、ジョージ・ワシントンを改めて尊敬します。その人が書いたものや、その人について書かれたものから、その人の人格に触れ、その生き方に共鳴できたなら、それもまた、その人自身を知ることになると思います。貧しい子ども時代を過ごしたリンカーンは聖書とワシントンの伝記の二冊の本しか持っていませんでしたが、聖書を読み神のみ心を知り、『ワシントン伝』を読んでワシントンの人格に触れたのでした。

私たちも同じように聖書を読みたいと思います。「知識」によってだけではなく、「知恵」によって聖書を知りたいと思います。聖書が 66 巻あって、旧約と新約に分かれており、その主題はイエス・キリストであり、そのメッセージは神の愛であるということを知ったからといって、ほんとうに聖書が分かったことにはなりません。イエス・キリストが、この「私」のために十字架で死んでくださった。神はそれほどにこの「私」を愛してくださっている。そのことが分かって、神の愛を受け入れたとき、私たちは、はじめて、聖書が分かるようになるのです。聖書を誰か他の人のためのものとしてではなく「私」のために書かれたものとして読む。それが私た

ちに求められている聖書の読み方なのです。

ですからテモテ第二 3:15 には「聖書はあなたに `知識、を与えて…」ではなく、「聖書はあなたに `知恵、を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです」と書かれています。客観的な「知識」だけでは、キリストの救いを自分のものにすることはできません。私たちが聖書に向き合い、聖書が与える「知恵」を受けてこそイエス・キリストの救いを自分のものとすることができるのです。

## 二、聖書の学び

聖書が分かるのは、最終的には、聖書が与える「知恵」によるのですが、では、知識は必要ないのでしょうか。いいえ、決してそんなことはありません。多くの場合、「知恵」は「知識」という土台の上に与えられます。知識を積み重ねれば、それが自動的に「知恵」となるわけではありませんが、「知識」から「知恵」に導かれることが多いのです。

例をあげます。ルカ 19:35 に「イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた」とあります。この人は、ふだんよりも大勢の人々が通っていくのを耳で聞き、何事が起こったのかと人々に尋ねました。「ナザレのイエスがお通りになるのだ」という答えが返ってきました。当時、人々は姓を持たず、名前しか持ちませんでしたから、イエスも「ヨセフの子イエス」とか「ナザレのイエス」とか呼ばれていました。ナザレの町があったガリラヤ地方は貧しく、文化

的に遅れた地方でしたので、首都エルサレムいたユダヤの指導者たちは、「ナザレのイエス」という呼び名に軽蔑の意味を込めていました。

この目の見えない人は、「ナザレのイエスがお通りになるのだ」と聞いてイエスを呼び求めたのですが、「ナザレのイエスよ」ではなく、「ダビデの子イエスよ」と叫んでいます。「ダビデの子」という呼び名には意味があります。神がダビデに約束された救い主を指します。この盲人は、イエスを救い主と信じ、イエスに救いを呼び求めたのです。イエスは彼の信仰をごらんになって、その目を開き、ご自分が救い主であることを示されました。とても感動的な出来事です。

さて、次にマルコ 10:48 を見ましょう。「彼らはエリコに来た。イエスが、弟子たちや多くの群衆といっしょにエリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた」とあります。ルカもマルコも同じ人のことを書いています。ルカでは名前が記されていませんでしたが、マルコでは「バルテマイ」という名であったことが分かります。ここで、マルコ 10:48 とルカ 19:35 を比べると、明らかな矛盾があります。マルコは、バルテマイの目が開かれたのは、イエスが「エリコを出られる」時だと言っているのに、ルカは、イエスが「エリコに近づかれたころ」と言っているのです。イエスがバルテマイの目を開いてくださったのは、イエスがエリコの町に入るときだったのか、それとも出ていくときだったのか。マルコとルカのどちらが正



しいのでしょうか。

じつは「どちらも正しい」のです。実は、エリコの町には旧市街と新市街がありました。エリコはエルサレムに巡礼に上る人たちが必ず通るところで、いわば神殿の「門前町」として栄え、町は大きくなり、新市街が出来上がっていたのです。イエスは旧市街から新市街へと歩いてゆかれ、バルテマイは旧市街と新市街の境目にいたのです。マルコは旧市街を「エリコ」と呼び、「イエスが…エリコを出られると、テマイの子のバルテマイという盲人のこじきが、道ばたにすわっていた」と書きました。ルカのほうは、新市街を「エリコ」と呼んで、「イエスがエリコに近づかれたころ、ある盲人が、道ばたにすわり、物ごいをしていた」と書いたのです。

聖書を読んでいくと、このように一見矛盾と思える箇所に出会います。そのような時は、丹念に聖書を調べ、その時代のことや、文化、習慣、地理などを学んでみると解決が与えられることが多いのです。聖書を繰り返し読み、分からないところがあったら、そのまましておかないで、そのつど牧師に尋ねたりして解決していく、そんな日常の努力を積み重ねることによっても「聖書が分かる」ようになります。

### 三、聖霊の照明

しかし、聖書に語られている神のみこころが分かるようになるためには、学びだけでは足りません。私たちの内に神のみこころを知りたいという願い、それを知ったなら実行するという決意が必要です。そのためには、祈

りながら聖書を読む「黙想」という作業が必要です。知識を得ようとして聖書を読むのではなく、聖書から神の語りかけを聞くために聖書に向かうのです。自分が主体で、聖書は研究の対象というのではなく、聖書が主体で、自分をその下に置くのです。「聖書を読む」というよりは「聖書に聞く」のです。聖書と対話をすると言ってもよいでしょう。そのためには、その日に読んだ箇所を中心的な部分を何度も唱え、暗記して、それを思い巡らすのが良いと思います。「暗誦聖句」はサンデースクールで子どもたちが毎週することですが、それは大人にも必要なことです。「暗誦聖句」は「黙想」への第一歩となるからです。

聖書は聖霊によって私たちに与えられた神のことばです。聖霊は聖書を書いた人、それを編集した人、それが文字として文書として残される過程に働いてくださり、私たちがこんにち手にしている聖書を与えてくださいました。この聖霊の働きを「靈感」と言います。ですから、聖書には、モーセやイザヤ、マタイやパウロなど、多くの著者がいても、その人々の背後におられる真の著者は聖霊であると言えます。そして、聖書の著者に働いてくださった聖霊は、聖書の読者にも働いてくださるのです。聖書は聖霊によって与えられました。ですから、聖書が分かるのも、聖霊によるのです。私たちが聖書から受ける「知恵」、また聖書を理解する「知恵」は聖霊から来るのです。エペソ 1:17に「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、

神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように」とある通りです。聖霊は「知恵と啓示の御霊」です。続いて「また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように」（18-19節）と言われているように、聖霊は聖書を読む人の心を照らし、心の目を開いてくださいます。この聖霊の働きは illumination（日本語で「照明」）と呼ばれています。同じ、おひとりの聖霊が「啓示の御霊」となって、inspiration（靈感）によって私たちに聖書を与えてくださり、また「知恵の御霊」となって、illumination（照明）によって、私たちに聖書を分らせてくださるのです。

キャンベル・モルガンという説教者は、自分の机の向こう側に、いつも椅子を一つ置いて、説教や著作の準備をしました。聖書で分からないところがあると、彼はペンを置いて、しばらくの間、自分の前にある椅子に目を向け、あたかもそこにイエスがおられるかのようにして、その箇所にあるみ心を教えてくださいと祈って、原稿を整えました。キャンベル・モルガンを多くの説教者は「知恵と啓示の御霊」の働きを、常に祈り求めて、聖書に取り組んでいるのです。

同じように、私たちも聖霊の照明を祈り求めて、聖書

に向かいましょう。聖書を読む前に、また、その途中で、そして聖書を読み終えてからも、聖霊の働きを祈り求めましょう。「私の心の目を開いてください」、「私に知恵を与えてください」、「あなたのみ心を教えてください」など短く祈るだけでよいのです。そうした祈りの心で聖書を読むなら、ただ義務的に聖書を読んでいる時の何倍も聖書が分かるようになります。

そのような祈りは、それぞれが自分の言葉で祈ればよいのですが、古くから伝わる祈りがいくつかありますので、そうしたものを祈るのも良いでしょう。きょうは、その中の一つを皆さんと一緒に祈って、メッセージを閉じたいと思います。

(祈り)

主なる神よ。真理を求めている私に、その道をお示してください。心のきよさと、平和とを求めている私に、それを得る方法をお教えてください。私は、今、自分の弱さを認め、謙遜にあなたを仰いでいます。私が、この短い一生を良く過ごし、その目的を達し、家族、友人、社会に対する自分の義務をよく果たすことができるために、光と助けとをお与えください。聖霊により主イエスを通して祈ります。

## みことばを心に

コロサイ 3:16

キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌により、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。

聖書は神のことばです。詩篇に「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」（詩篇 119:105）、「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます」（同 130 節）とあります。しかし、書店や出版社の倉庫にある聖書から光が出ているわけではありません。聖書は、そのままでは他の書物とかわらず、ペーパーとインクでできたものに過ぎません。聖書は、私たちがそれを読み、学んで、心に受け入れ、心に刻みつけ、心に蓄えたとき、私たちの心を照らす光、私たちの人生の歩みを導くともしびとなるのです。

それで、コロサイ 3:16 では「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませなさい」と教えられているのです。きょうは、この聖句から「キリストのことば」とは何か、それを「住ませる」とはどういうことなのか、そして、「豊かに住ませる」ために具体的にどうすればよいのかをご一緒に考えてみましょう。

### 一、キリストのことば

まず、「キリストのことば」とは何でしょうか。「キリストのことば」には、「キリストが語っておられる」

という意味と「キリストを語る」という二つの意味があります。聖書は、まず、「キリストが語られたことば」です。最近の英語の聖書の多くはキリストが直接語られたことばが赤いインクで印刷されています。では、そうした部分だけがキリストのことばで、他はそうではないのでしょうか。いいえ、聖書は、旧約も含めて全体が「キリストのことば」、キリストが語っておられることばです。

ペテロ第一 1:11 は、旧約の預言は預言者たちのうちにおられたキリストの霊が、預言者たちに言葉を授けたものであると教えています。また、ヘブル 1:1-2 に「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました」とあります。

テモテ第二 3:16 では聖書の著者は聖霊であると言われていますが、コロサイ 3:16 は、聖書は「キリストのことば」、聖書は神がキリストを通して聖霊によって語っておられると言っているのです。私たちの手にしている聖書は、父・子・聖霊の三位一体の神がくださった聖なる書物、The Holy Bible なのです。私たちは、そんな天からの書物を持っているのです。このことにもっと感謝し、もっと聖書に親しみたいと思います。

聖書が「キリストのことば」と呼ばれるのは、また、聖書が「キリストを語っている」、つまり、聖書の主題がイエス・キリストであるからです。イエスが「聖書

が、わたしについて証言している」（ヨハネ 5:39）「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する」（ルカ 24:44）と言われたように、聖書はキリストを証言するもの、イエスが神の御子キリストであることを教えるものです。

コロサイの教会をはじめ、アジアの諸教会は、キリストを人間や天使のひとりにも格下げする間違った教えの影響を受けていました。パウロはそうした誤った教えを「だましごとの哲学」、また、「幼稚な教え」と呼びました。コロサイ 2:8 にこうあります。「あのむなしい、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。そのようなものは、人の言い伝えによるものであり、この世に属する幼稚な教えによるものであって、キリストに基づくものではありません。」誤った教えを説く人々も聖書を使いました。しかし、彼らは自分たちの教えに都合のよいように聖書を使っているだけで、聖書をキリストを証しするものとして読んでいなかったのです。

聖書は、第一級の歴史資料です。歴史として研究しても興味深いものです。文学として読んでも感動を与えてくれます。また、ここには人生の知恵がぎっしりと詰まっています。聖書は、どんなふうにも読んでも、役に立ちます。聖書は私たちの心を温めてくれる慰めの言葉、励ましの言葉に満ちています。しかし、聖書から、いわゆる「元気の出る言葉」だけを取り出しても、それがキリストに結びついていなければ、人をほんとうに力づけ

るものとはなりません。知恵も、希望も、慰めもキリストから来るからです。C. S. ルイスは “Mere Christianity” で「真理を求めないで慰めだけを求めてもそれは与えられない。そんなことをしても真理も慰めも得ることはできない。しかし、真理を求めるなら、真理とともに慰めを得る」と言っています。キリストは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」（ヨハネ 14:6）と言われました。真理であるキリストを脇においたまま、いわゆる「心に響く言葉」だけを聖書から取り出しても、それはほんとうの意味で神のことばを自分のものにしたことにはなりません。聖書を「キリストのことば」として読み、真理を見出し、その真理が与える力や慰め、励ましを自分のものになりたいと思います。

## 二、住ませること

次に「住ませる」という言葉ですが、これには「家に迎える」という意味があります。軒下を貸すということではありません。家族が「ひとつ屋根の下に住む」ということです。家族と一緒に生活する親密な関係を描いています。みことばを、時たま訪れる来客としてではなく、一緒に生活する家族として迎えるのです。そうすることによって、キリストが聖霊によって私たちの心のうちに住んでくださるようになるのです。

ローマ 7:17-20 には「私のうちに住みついている罪」という言葉が繰り返し出ています。これは人の内面に「住みついて」離れない罪の現実を描いています。人は自分の力で、自分のうちに「住みついている罪」を追い出す



ことはできません。罪に代わってキリストが聖霊によって私たちの内に共に住んでくださることによってしか、罪を追い出すことはできません。「キリストのことばを住まわせる」とは、神のことばを聞いて、信じて、受け入れて、聖霊を私たちの内側にお迎えすること、日々の生活でキリストを主としてあがめて歩むことなのです。

「キリストのことばを住まわせる」ということで、思いうかべるのは、種まきのたとえ（マタイ 13:1-9）でしょう。種を蒔く人が蒔いた種は、道端に、岩地に、茨の中に、そして良い地に落ちました。道端に落ちた種は鳥に食べられてしまい、岩地に落ちた種は芽を出したものの、根を張ることが出来ずに枯れてしまいました。茨の中に落ちた種は芽を出し、根を張ることはできたのですが、茨に被われて伸びることができませんでした。しかし、良い地に落ちた種は成長して実を結びました。みことばを住まわせるとは、私たちの心が良く耕された畑地のように柔らかくなっていて、みことばの種を包み、そこにある命を育むことなのです。みことばにはいのちがあります。私たちのところが道端のように神に対して頑固でなければ、また、岩地のように浅いものでなければ、さらに、茨のように神以外のものに占領されているのでなければ、みことばはそこに根を下ろし、成長し、実を結びます。みことばはみことば自体が持っている命によって成長するのです。私たちがすることは、良い土地となってみことばに場所を与えることです。

キリストはヨハネ 15 章で「わたしにとどまりなさい。

わたしも、あなたがたの中にとどまります。…あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」（ヨハネ 15:4, 7）と言われました。キリストのことばが私たちのうちにとどまっているなら、私たちもキリストにとどまっていることを確信することができます。私たちがキリストに願い、キリストがそれをかなえてくださるという祈りの交わりは途絶えることがないのです。この幸いは、何年もかかってやっと手に入れることができるような難しいものではありません。それは、忠実に、心を込めて聖書を読み、それを受け入れるすべての人に与えられるものです。この幸いは、みことばを心のうちに「住まわせる」ことによって私たちのものとなるのです。

### 三、みことばを住まわせるために

では、「キリストのことばを住まわせる」ため、具体的にどうすればよいのでしょうか。四つのステップをお話しします。

第一に、まずは聖書を「読む」ことです。あるアメリカ人が私に「二年で聖書を全部読みました」と言いました。その人は日本語を話す人ではなかったのですが、英語の聖書を読んだのだと思ったのですが、よく聞いてみると、なんと日本語の聖書を全部読んだというのです。日本語で聖書を朗読したものを耳で聞きながら、聖書を読んでいったそうです。全巻を読み通すのは母国語でも大

変なことなのに、外国語で読んだというのです。私たちも、それぞれ自分のペースで、聖書を読み続けましょう。毎日欠かさないことが大切です。

第二に、聖書を黙想することです。聖書をただ読んで終わるのではなく、読んだ箇所を中心的な言葉について、時間をかけて思い巡らすのです。これは、牛が食べたものを反芻することにたとえられます。牛は胃袋を四つ持っています。第一の胃袋は大きなもので、草をいっぱい入れることができます。第二の胃袋は、ポンプの役割りをしており、第一の胃袋に入ったものを口に戻します。牛は、それをさらに細かく噛み砕き、噛み砕かれたものは第二の胃によって、第三の胃に送られ、さらに第四の胃で消化酵素と混ぜて、腸で栄養となって吸収されます。牛は一日6時間から10時間も口をモグモグさせて、反芻しています。牛だけでなく、シカやキリンなどもそうやって食べ物から栄養素を徹底的に吸収するので、草だけでも生きていけるのです。聖書の養分を吸収するために、くりかえし噛み砕き、すりつぶす反芻のような作業、それが黙想です。

第三に、祈りによってみことばに応答しましょう。聖書を読み、黙想によって与えられたことに、祈りによって答えるのです。それは、決まりきった祈りでなく、みことばへの応答の祈りです。ですから、みことばによって神の栄光に心打たれたなら、その祈りは賛美の祈りになるでしょうし、キリストの恵みを示されたなら感謝の祈りになるでしょう。また、罪を示されたなら悔い改め

の祈りに導かれ、神の約束を示されたなら、それに従って願い求めましょう。もし、聖書を読み黙想しても、何も得られなかったり、疑問が残ったままであったとしても、正直に「主よ。このことが分からないのです。教えてください」と祈ればよいのです。聖書を読み進むうちに、かならず答を得るようになります。

第四は「瞑想」です。これは祈りの後に自分自身を神に委ね、神が私と共におられることを確認する時です。

「確認する」というと、自分が何かをするように聞こえますが、瞑想では神に身を委ねるので、実際のところは、神がその臨在を示してくださるのです。時計の時間ではごく短くても、何時間も主のそばにいたように感じるのが普通です。第二のステップの「黙想」と第四のステップの「瞑想」は似てはいますが、主体が違います。黙想は聖書との対話で、聖書に問い、聖書に聴くのですが、そこでは人が主体です。しかし、瞑想では人は神の臨在の中に身を置くだけで、神が完全に主体となります。祈りのあと、すぐ立ち上がるのではなく、主の臨在に包まれる体験をもって立ち上がるのが大切です。それが朝の祈りなら、私たちの一日は、充実したものになり、それが夜の祈りなら、一日の疲れをいやすものとなります。

読む (lectio)、黙想する (meditatio)、祈る (oratio)、瞑想する (contemplatio)、この四つのステップは中世の修道院で Lectio Divina (聖なる読書) と呼ばれ、修道士たちによって実践されました。時代を経て、今まで学者

や修道士、説教者や一部の知識人だけのものであった聖書が、多くの人々のものになり、今はだれもが「聖なる読書」ができるようになりました。それで「レクチオ・デヴィナ」が見直され、広く用いられるようになりました。この四つのステップは互いに重なりあうことがあり、必ずしも順序通りに進むとは限りません。神は主権者であり、自由にものごとをなさいます。しかし、多くのキリスト者の実際の体験の中から生み出された「レクチオ・デヴィナ」は、勝手気ままに聖書に向かうことから私たちを救ってくれます。これを活用し、「キリストのことばを私たちのうちに豊かに住まわせる」のに役立てたいと思います。

### (祈り)

父なる神さま、今も、聖書を手にするのを禁じられたり、買い求めることができなかつたり、聖書を教える人がいない国が多くある中で、私たちはこうして聖書を自由に読むことができます。このことを当たり前のことと思わず、この特権を生かして、さらにみことばをうちに住まわせることができるよう、私たちを導き助けてください。主イエスのお名前です。

# 人生の道しるべ

## ヤコブ 1:21-22

1:21 ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。

1:22 みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。

### 一、みことばに導かれる

みなさんは、きょう、ここに来るのに、GPS を使ってきましたか。Google Map で調べてきたでしょうか。私ははじめてアメリカに来たとき GPS もインターネットもありませんでした。アメリカに来て最初の日曜日、教会から家に帰るのに、近くまで来ているのに借りている家が分からなくなつてしまいました。ガス・ステーションで、「私の家はどこでしょう」と尋ねました。幸い、親切な人に道案内してもらって、やっと帰ったことがありました。それ以来、いつも車に地図を入れてドライブするようになりました。そして、フリーウエーの出口のサインや、ストリート・サインなどよく見るようにしてきました。

ドライブに地図や GPS、また、道路のサインが必要なように、私たちの人生にも「道しるべ」が必要です。ドライブするときにはまず目的地を決めて、それから、そこに行く道を捜します。いくら地図や GPS、また、道路のサインがあつても、行き先のアドレスが分からなかつ

たら、そこに行くことはできません。また、間違ったアドレスを GPS に入れてしまったら、とんでもないところに着いてしまいます。

私たちの人生も同じです。多くの方は人生の目的地が分からないまま、北に南に、東に西に走り回っているだけです。

こんな話があります。牧師が、ひとりの大学生に尋ねました。「君の人生のゴールはどこですか。」「まずは、無事に大学を卒業することです。卒業式を迎えられるように頑張ります。」「卒業式が終わったら、どうするんですか。」「どこかに就職して、そのうち恋人もできて、幸せな結婚式ができるといいですね。」「結婚式のあとは、どうするんですか。」「スチューデント・ローンを払い終わったら、今度は住宅ローンを組んで、郊外に素敵な家を持ちたいですね。そして、友達を呼んでパーティをするんです。」「そうですか。そのパーティの後は。」「先生、よしてくださいよ。そんな先のことは考えていませんよ。あとはリタイアして、リタイアメント・ホームに移るでしょうね。残っているのは、お葬式くらいなものでしょう。」「なるほど、では、君は、お葬式をするために今、一所懸命勉強し、これから何十年も働き、生きていこうとしているのですね。」この若者は、牧師の言葉に、ハッと気付きました。「そうだ、ぼくは自分の人生の目的を持っていなかった。これから真剣にそれを求めよう。」

人生は「旅」だと言いますが、もし目的地がなかった

ら、それは「旅」でいではなく「放浪」になってしまいます。たった一度しかない人生を「放浪」で終わらせるのは、なんと無意味で残念なことでしょう。人生の旅には目的地が必要なのです。

アンパンマンの作者、やなせたかしさんは、アニメ・アンパンマンのテーマソングを次のように作詞しました。

何の為に生まれて 何をして生きるのか  
答えられないなんて そんなのは嫌だ！  
今を生きることで 熱いところ燃える  
だから君は行くんだ微笑んで

何が君の幸せ 何をして喜ぶ  
解らないまま終わる そんなのは嫌だ！  
忘れないで夢を こぼさないで涙  
だから君は飛ぶんだ何処までも

アンパンマンは幼稚園くらいの子どもたちを対象にしたアニメです。アニメのプロデューサーは、「何の為に生まれて、何をして生きるのか」「何が君の幸せ、何をして喜ぶ」などといったことを幼稚園のこどもが考えるわけがないと、この歌詞に難色を示しました。しかし、クリスチャンであったやなせさんは、人は皆、「何の為に生まれて、何をして生きるのか」という人生の目的、「何が君の幸せ、何をして喜ぶ」という人生の意味を求めて生きていることを知っていました。ちいさな子どもは大人のようにそれを言葉にできませんが、たましいの



奥底に人生の目的と意味を求める思いを持っているのです。それが、人間なのです。やなせさんは「ぼくらはみんな生きている」という歌も書きましたが、その歌は、人生の目的と意味を知るとき、はじめて生きる喜びを味わうことができることを暗示しています。

聖書は人生という旅を導く地図、GPS、「道しるべ」です。しかも、私たちの人生の目的地をはっきりと示してくれる、唯一の「道しるべ」なのです。

## 二、みことばに聞く

では、聖書をどのようにして人生の「道しるべ」にすればよいのでしょうか。何か困ったことがあったら、目をつむって聖書のどこかのページを開き、指さしたところの言葉を読めばよいのでしょうか。いいえ、聖書はそんなふうには読むものではありません。聖書は、順序を踏んで読み、礼拝でメッセージとして聞き、他の人と一緒に学び、そして、大切な聖句を暗記し、心に蓄えるものです。そして、素直な心で神のことばを受け入れるとき、神の言葉は私たちにイエス・キリストによる永遠の救いに導きます。また、生活の実際的なさまざまな場面で、私たちを正しい道へと導いてくれるのです。きょうの聖書の箇所、ヤコブ 1:21 はこう言っています。「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」

ここにある「すべての汚れ」の「汚れ」というギリシャ語は「ルパリア」(ῥυπαρία)ですが、それに関連し

た言葉に「ルpos」（ρύπος）というのがあります。これには「汚れ」は「汚れ」でも、耳の「汚れ」、「耳垢」という意味があります。耳垢が溜まると難聴になることがあります。同じように、心の耳垢が溜まって、神の言葉を素直な心で聞くことができないことがあるのです。イエスはしばしば「聞く耳のある者は聞くがよい」と言われましたが、それは、心の耳垢が取り除かれ、神の言葉をよく聞くことができる耳を持っている人のことでしょう。

GPS は車のダッシュボードに置いておけば、指示を出してくれますが、聖書は戸棚において置くだけでは、人生の導きとなりません。毎日聖書に親しみ、神の言葉を心に蓄えることによって、私たちの人生の旅を間違いなく目的地まで導いてくれる人生の GPS となるのです。

### 三、みことばを行う

カリフォルニアの教会に、とても愉快な人がいました。ある時、彼女はこんな話をしてくれました。「主人が、『今度買った車はオートマチックだよ』というので、ワクワクしていました。ところが主人はやっぱり運転しているのです。それで主人に、『オートマチックなのになぜ運転しているの』言ったら、笑われてしまいました。私は、座っていれば、勝手に行きたいところに行けるのかと思っていました。」真面目な顔で話すのでよけいに面白かったのです。そのころはまだ自動運転の車など無く、「オートマチック」というのは「シフト」操作がいらぬという意味だったのです。けれども、今

は、ほんとうに自動運転の車が実用化されようとしています。彼女はもう亡くなりましたが、生きていたら、「ほらね、私が言ったように、座っているだけで行きたいところに行ける車ができたでしょ」と得意になって言うことでしょう。

自動運転の車は GPS とコンピュータで動くのですが、聖書が私たちの人生の GPS だからといって、神は私たちの人生を自動的に動かすわけではありません。人生という車は自動運転ではないのです。そのステアリング・ホイールも、アクセルも、ブレーキも、そして変速ギアも、私たちの操作に任せられています。みことばに従うか、従わないかは、私たちの側で決めることなのです。

GPS では、道を曲がる時、あと何マイル、あと何ヤードというところに近づかないと、指示を出してくれません。道を曲がるそのつど、指示を聞いて従わなくてはなりません。人生の道は、決して一直線ではありませんから、私たちも、そのつど、神の言葉に聞き、それに従っていく必要があります。聖書に「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です」（詩篇 119:105）とあります。神の言葉は「道の光」、つまりサーチライトのように、歩むべき道を遠くまで照らしてくれることもあれば、「足のともしび」、つまり、昔あった提灯のように、次の一歩しか照らしてくれないこともあります。その場合でも、一步一步を進めていけば、間違いなく目的地に向かうことができます。「一日一歩」の確実な歩みが積み重なって、確かな人生を歩む

ことができるようになります。

ですから、ヤコブ 1:22 はこう言うのです。「みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。」「みことばを行う人になりなさい」は英語で `Be doers of the word.、となつていません。21 節で学んだように、私たちは、まず、みことばの「聞き手」(hearer) にならなければなりません、  
「聞き手」(hearer) だけで終わらず、「行い手」(doer) になりなさいと教えられているのです。

「みことばを行う人になりなさい」というのは、何でもいいから聖書が教えていることを行いさえすればよいということではありません。「行う人」(doer) と訳されている言葉は `maker、つまり何かを「作る人」と訳すことができます。何を作るのでしょうか。自分の人生を形作るのです。私たちの人生は、自分の思い通りにならないことのほうが多いでしょう。こんなふうにしたかった、あんなこともやっておけばよかったと後悔することも多いと想います。自分で自分の人生を形づくるところか、いつもまわりの人にふりまわされてきたと感ずることがあるでしょう。しかし、イエス・キリストを信じたとき、私たちは神によって新しく造られました。私たちも神とともに自らの人生を形作っていくのです。

また「行う人」という言葉は `composer (作曲家)、poet (作詞者)、performer (演奏者) などを指すのにも使われます。みことばを守り行う人は芸術家だと言われています。人の目には平凡なものに見えたとして

も、神を信じる者の人生は、神の前には、創造的で、美しいものになるのです。神の言葉は、私たちにそんな人生を与えてくれます。

聖書を、読んで、聞いて、学んで、覚えて自分のものとしましょう。この四つのことは、人差し指から小指までの四本の指のそれぞれに割り当てることができます。しかし、四本の指だけで聖書を持っていても、それだけではしっかりと保っていることはできません。そこに、もう一つの指、「実行する」を加えましょう。「実行する」というのは親指のようなものです。四本の指と親指とでしっかり保たれている聖書は、簡単には手から離れません。そのようにして神の言葉を握りしめましょう。そしてみことばに導かれ、確かな人生を歩みましょう。

### (祈り)

父なる神さま、今朝、私たちは「みことばを行う人になりなさい」`Be doers of the word.との言葉を聞きました。私たちは、きょう、今から、この言葉を実行します。私たちを柔らかい心でみことばを「聞く者」とし、堅い意志で「みことばを行う人」にしてください。主イエスのお名前です。

ユダヤの人々の信仰は聖書に根ざしています。ユダヤの人々は「聖書の民」といってよいほどに、伝えられた「律法」を尊び、それを守ろうとしてきました。ユダヤの人々の律法との結びつきは神殿を失くしたことによって一層強められました。ユダヤの人々は神殿を二度失くしています。一度目は紀元前586年で、バビロンによってでした。そのときエルサレムの主だった人々はバビロンに連れていかれましたが、彼らは「律法」を携えていきました。神殿の祭儀は失われましたが、「律法」が彼らの導きとなり支えとなりました。神殿崩壊から70年後、紀元前515年に神殿が再建され、祭儀が復活しましたが、「律法」にもとづいた信仰はいよいよ盛んになりました。主イエスや使徒たちの時代には、ユダヤの各地ばかりでなく諸外国のユダヤ人寄留地にも「会堂」が建てられ、安息日ごとに「律法」が朗読されていました。

神殿が二度目に失われたのは紀元70年、ローマによってでした。それは今も失われたままで、かつて神殿があった場所にはムスリムのモスクが建てられています。ユダヤの人々は神殿を失い、国を失いましたが、律法学者たちはヘブライ語の聖書を守り通しました。

ユダヤの律法学者の聖書解釈と使徒たちのそれとは違っていますが、聖書に対する敬愛は変わりませんでした。キリスト者の信仰も、聖書に堅く根ざすものなのです。





**Penguin Club**  
[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)